

# トキが教えてくれたこと

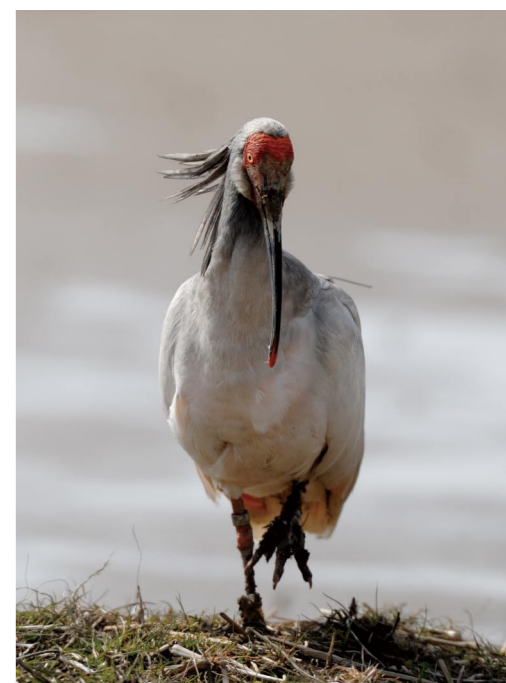
土木界限 四季の鳥 番外編

先月号まで1年間にわたって連載された中田一真さんの「土木界限 四季の鳥 一私たちの近くに息づく野生」によって、私たちは身近な鳥たちの生き生きとした姿を知ることができた。しかし、登場したのは日本に棲む鳥のごく一部に過ぎない。多様な環境でそれぞれの生き方をする鳥たちを20年以上観察している中田さんの目にはいま、鳥たちの置かれた厳しい状況がどう映っているのか？ ここではその思いを綴っていただいた。連載では取り上げなかった稀少といわれる鳥たちの写真もぜひじっくりご覧いただきたい。  
(喜多 直之)

担当編集委員：喜多 直之／写真・文：中田 一真

2008年の秋、佐渡島で10羽のトキが野外へ放された。彼らは、中国から譲り受けた鳥を繁殖させたものだ。日本で野生トキが保護・増殖のためすべて捕獲されたのは1981年。私が野鳥観察を始めた20数年前、トキはすでにケージの中の鳥だった。そして願いが適わぬまま日本産トキが絶滅したのは2003年のこと。自分が生きているこの時代に野鳥が一種、わが国から姿を消した。これはどういったことなのか。ずっと、もやもやとした気持ちを抱え続けていた。

「自然破壊」「地球温暖化」「種の絶滅」…悲観的なフレーズを誰かが唱えるたび、いてもたってもいられなくなつて旅



出た。北の原野にシマアオジのさえずりを求め、ライチョウを探して高山帯をさまよう。太陽に焼かれながらイヌワシを待ち続けた日もあった。シマフクロウの声を聞いた凍てつく夜は、胸が高鳴り眠ることができなかった。

彼らは人の手が入らない自然を舞台に生きてきた鳥だ。原野に高山、山岳地帯に深い森。彼らが必要としているものをわれわれは、ずいぶん奪ってきた。山を削り、海を埋めた。まちを広げ、気候さえも変えてきた。

トキは違う。コウノトリも違う。彼らは人の暮らしに寄り添うように生きてきた鳥たちだ。昭和30年代まで延々と続いていた地産地消・完全循環型の里山社会、彼らはそこでわれわれとともに暮らしてきた。だが、その関係を一方的に解消した

のもわれわれだった。水田の農業汚染に始まり、それが収まった後も里山は形を崩し続け、残っているのは圃場整備の終わった田んぼばかり。機械の入らない山間部の田は放棄され、雑草が生い茂り、月日とともに山に飲み込まれていく。草刈場も、薪炭材を採取する雑木林も、化学肥料や電気・ガスが普及した今、誰も顧みはしない。荒れた雑木林はイノシシやシカのすみかとなり、外来種のソウシチョウがわが物顔で飛び交っている。

こんな時代にトキが放された意味を知りたかった。放鳥トキに会いたくて、2009年3月、佐渡島を訪ねた。

時折小雪舞う島内をレンタカーで走り回る。さすがに日本で4番目に大きな



ドジョウを捕えた

休耕田で水浴びをする



なかた・かずま  
1966年生まれ。会社員、野鳥写真家。身近な鳥たちの四季折々の姿を20年撮影し続けている。

鳥、会えないかも知れないという不安がよぎる。幸い、鳥の匂いを嗅ぎつけて、合計2羽のトキに会うことができた。1羽は比較的狭い山際の田んぼで、もう1羽は見晴らしの良い開けた田んぼで。

トキはユーモラスな鳥だった。顔は赤くて頭は禿げ上がっている。胴が長くて足は短い。目は真ん丸で、いつも何かに驚いた風。「絶滅」という重い現実を背負っているとは思えない飄々とした風情に、勢い込んでここまでやって来た自分のことを笑いたくなる。よかった、トキに会えて。よかった、こんな面白い生き物が日本にいてくれて。

彼らを観察していて気づいたのは、その食欲の凄さと、それを支える佐渡の田の懐の深さだ。トキはひっきりなしに田んぼの泥をつつき、ミミズやドジョウ、カエルなどをつばみ、飲み込んでいた。佐渡の田は冬でも水を蓄えて、多くの生き物を抱えている。これがたとえばわが町の田んぼなら、冬はカラカラに乾いている。重量のある耕作機械が使えるように、できるだけ水気をなくすためだ。圃場整備の終わった田では、全国どこでもそうだろう。そこにはトキの餌はない。

生物多様性確保の重要性が叫ばれている。鳥を観察しながら、多様性を確保しなければならないのは、われわれの生き方ではないかと考える。トキが再びわれわれとともに生きていくには、安全な水と

豊富な餌、手入れの行き届いた林が必要だ。果たして今、われわれはそれを用意してやれるのか。

頭の中で、時計の針を一世紀ほど戻してみる。場所はわれわれが生まれる前のある農村。萱葺き屋根の一軒家がある。裏山は芝刈りの行き届いた雑木林だ。山間の田んぼで米をつくっている。農業を使わないその田では、カエルやドジョウがわが物顔で暮らしている。耕運機はなく、牛が働いているだろう。化学肥料もなく、肥溜めには糞尿が寝かせてある。夜は暗くて星が降るようだ。そして、裏山の木の上では、トキが身体を丸くして眠っている。

もちろん、石油がなくなりでもしない限り、こんな暮らしに戻ることはない。それでもわれわれの未来の暮らしと、ご先祖の暮らしとはどこかでクロスする必要があるのではないか。トキが教えてくれたのは、きつとそういうことなのだと思う。



シマフクロウ



ソウシチヨウ(外来種)



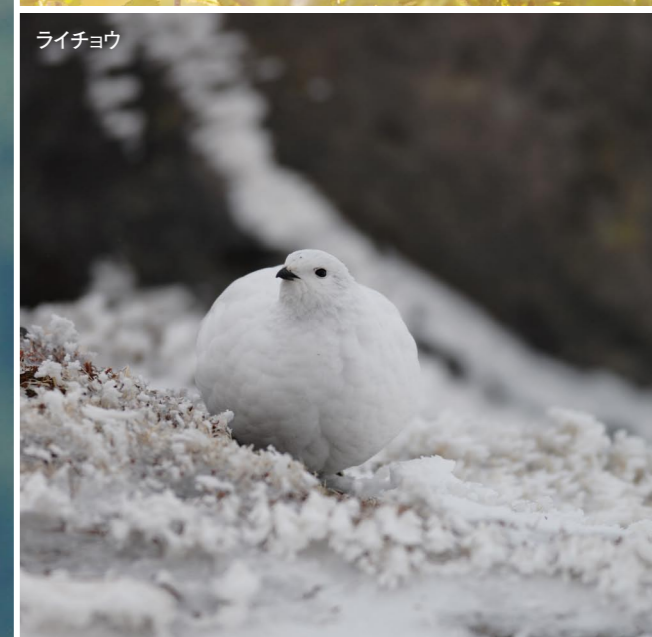
イヌワシ



シマアオジ



コウノトリ



ライチヨウ